

第五編 Thimlich Ohinga の遺跡を尋ねて

リビングストンの探検やスピークの冒険を読んで、アフリカに行ったなら必ずやビクトリア湖を尋ねてみたいと思うようになっていた。3月30日にキスムで見たビクトリア湖の景観は素晴らしかった。4月1日（快晴）の朝7時に、鴻池組のソンドミリウ（**Sondu Miriu**）水力発電所プロジェクト事務所に、昨晚お世話になった挨拶を済ませ、四輪駆動と運転手のジョージに励まされながら、最近誰も行った事がないとされる **Thimlich Ohinga** の遺跡探索に出た。ソンド（**Sondu**）は、既にキスムよりA1号線で1時間半余り南下しており、遺跡は更に南下したミゴリ（**Migori**）の辺りから脇道に入るらしいとの見当を付けていた。私たちの車は、事務所から10分くらいで国道A1に達し、ソンドを通過し、キシイ（**Kisii**）からミゴリに至る4時間を越えるドライブを続けた。途中曲がる地点を間違えて半時間のロスを蒙ったりしたがやっと右側に2度目の「**Gogo Falls Power Station/ Ken-Gen**」の看板がある地点に至った。そこを右に曲がる。そこからの道路は舗装されておらず、道路の真ん中に大きな水溜りがあったり、自動車の轍の跡が大きくなうねりになっていたりして、最悪の道路と思われたが、右へ右へと道を選択していくと2時間くらいで **Gogo Falls** に近付いた。土地の警察派出所に尋ねると、右に行けば **Gogo Falls** の発電所に至り、左に行けば、**Thimlich Ohinga** の遺跡に至るとの説明であった。左へしばらく行くと看板が出ており確かに **Thimlich Ohinga** と書いてある。そこを右に曲がり更に悪路の中に突入していくと、次第に不思議な景色が展開してきた。道路はいまだかつて車を受け付けたことがないかのように、縦横にクラックがはいり、地面を二筋にも三筋にも裂いている。雨が降れば全てが水路となり川と変わるのであろう。両側の景色は、アカシアの灌木で埋め尽くされており、黒土が豊かな地味を表している。何人かの歩く人々に聞くと、常に **Ohinga** は、あと2-3キロメートル先だと指さされるのだが、なかなか着かない。看板を見てから1時間の苦闘の運転でやっとケニア政府のモニュメントのマークと鉄条網でかこまれた目的地 **Thimlich Ohinga** の遺跡に着く。7時に鴻池組の現地事務所を出てから、12時を少し過ぎていた。キスムからだとして優に6-7時間はかかる気がする。

Thimlich Ohinga の遺跡は、鉄条網に囲まれており、柵の一角にある通用門を入ると、ボーマ（住居）が数個立っている。その小屋の一つが受付となっていた。何人かの地元の若者が、片言の英語で歓迎の言葉を述べているが、余り良くわからない。ジョージが、口火を切ってくれた。**Thimlich Ohinga** の遺跡は、**Nilotic-speaking Luo** とか **Lowland-Nilotes, the Luo** と呼ばれる種族（**Tribe**）の王宮跡とされている。**Nilotic** とは、ナイル川流域のスーダン南部からウガンダ、ケニアに分布している長身の諸種族で、ナイル語群を共通語としている種族のことをさすらしい。デインカ（**Dinka**）語、ルオー語、マサイ（**Maasai**）

語が該当するとのこと。ケニアの種族の多数派はキクユ族であるが、これはバンツー系である。キスムは、ルオー族が主導権を保持しているケニア第3の人口を誇る町である（ナイロビ 2143千人/モンバサ 665千人/キスム 323千人）。彼らに何処から来たのかと問うと必ず『スーダンから、ナイル川から』という答えが返ってくるという。そして彼らの源流をたどる遺跡として **Thimlich Ohinga** がある。しかしこの発掘調査はやっと1/4世紀前にワンデイバ博士 (Dr Simiyu Wandibba) によって開始されたが、不明な点がまだまだある。最近でも **World Monument Watch(NY)** という団体が US\$2.5百万を出して調査するといっていたが、一年半程の調査で昨年6月に中断してしまった。資金問題が原因だとのことだが、彼らが掘ったらしい四角い形の穴が各所にあった。

ナイロビ博物館の記録では、マーチン ピックフォード博士 (Dr Martin Pickford) が **Thimlich Ohinga** の遺跡を調査している。彼の報告書の要約は次の通りだった。

“**Thimlich Ohinga** は、大規模な石積み工事で作った壁構造 (a large number of drystone wall structure)、あるものは円形、あるものは卵形、そして他のより大きな石壁のなかに集落をなしているものなどを包含した地域。現在の調査は、約15エーカーでこれらの壁が残っている地域で実施されている。今のところ発見された最大規模のものは、直径約150メートル、高さ4メートル、厚さ約1メートルの構造物。その壁には多数の入り口があり、中には牛の頭の絵柄らしきものを描いた線や曲がある。この建造物は、防衛の為の砦らしい。なんとなれば通常丘の上にあり、その丘が40マイルの幅の帯に渡した鎖（遺跡の連鎖）の中心にあり、自然の要害であるグッチャ (**Gucha**) 川に平行しているから。しかし壁の中には、自然水の供給または貯水手段の跡がないので、包囲戦術を蒙りがちであったと思われる。女性と子供達は、反対派によって、食料や水を取るために外に出ることを許されていたかもしれないという仮説があるが、いかにも短期の砦 (**short-lived**) といわざるをえない。壁について「大変古い」としか言いようがない。考古学のワンデイバ博士 (Dr Simiyu Wandibba) が、現場から陶器を発見し研究しているので、後になって時代について光を与えてくれるかもしれない。人々の憶測では、調査が進めばかつてのローデシアにある有名な大ジンバブエ遺跡のケニア版であるとの発表になるだろうとみている。現在の入手した証拠から、植民地時代のずっと以前にケニア文明が存在したのは疑いないところ。この文明の建設者が、大ジンバブエ (**Greater Zimbabwe**) の遺跡や更に南のあまりぱっとしない遺跡の建設者達と同じ文化を共有していたかどうかは、今の時点では最早推測の域をでない。とにかくも現場の詳細な調査の結果を待ちたいと思う。”

数名のガイドに導かれて、**Thimlich Ohinga** の石壁に歩み寄った。

両手で持てるくらいの大きさの石を巧に積み込んである。あるものは円形でありあるものは卵形をなす石の構造物が、更に大きな外周を形成する石の壁のなかに群れを形成するよ

うに散在する。草むらに埋もれている大石は、建物の基礎石であっただろう。小さな円陣を成す石の集落の真ん中には牛などの家畜を囲い込む円形の壁が作られているし、外周の石壁にある出入り口はやっと牛や羊が通過できる間隙に過ぎない。老人達が無聊を慰める為に遊んだというゲーム石板や鉄を鍛えるために赤くなった鉄塊を、其のうえで叩いたという石盤を見せられた。話では溶解したスラグ（鉄を抽出した後の滓）の塊が土中から発見されたとのこと。見方によっては、確かにピックフォード博士の説のように「砦」ともみえる。建築年代を、大ジンバブエ [the Greater Zimbabwe] 遺跡とほぼ同時代と推定すれば、15世紀前半と言うことになる。

また **Thimlich Ohinga** の遺跡を、ルオー族の王族のホームステッド (Homestead) とする見方も有力のようだ。すなわち「王宮跡」説である。丘の上の集落は、最も身分の高い者の住まいと思われる。そこを頂点として鎖の輪をつくる石壁が川に向かって降りていくが、その鎖の輪一つ一つが小さなホームステッドを形成している。大きな石壁の円陣が少なくとも4つは確認できるというし、その一つに60人から100人が住んでいたと見る推定が行われている。小さなホームステッドであれば、10数人の住まいであっただろう。この近辺では金山の跡があり、今でも砂金が取れるとの話を聞いた。この金の生産も、**Thimlich Ohinga** の成立の経済的な背景の一つであつたに違いない。

ここで現在でも継続しているというルオー族のホームステッド (Homestead) のサンプルをキスム博物館 (Kisumu National Museum) に見ることができた。

垣根 (Defense) に取り囲まれた Homestead は、正面奥に第一夫人の家 (First wife's house)、中央左に第二夫人の家 (2nd wife's house)、中央右に第三夫人の家 (3rd wife's house)、各家には穀物倉庫 (Granary) が付いている。中央に夫の小屋 (Man's hat) があるのが、面白い。その小屋 (Hat) に近接して前方に家畜小屋 (Animal Shed) があり、正門 (Gate) を見張るように両側に息子の家 (Son's house) がある。正面の門 (Gate) の他に第一夫人の家の後方に小さな門 (Small Private Gate) がある。**Thimlich Ohinga** の遺跡の草むらに疎らに転がる礎石の跡から、この原型を、わずかに窺い知るほかはない。家の形は、ほぼ円錐形の屋根に、円筒形の壁が四囲を囲んでいる。大きい家もあれば小さな家もあつたに違いない。壁は、牛糞 (Cowshit) と泥 (Mad) をよくこね合わせ、木で作られている骨組みの間に壁土のように塗り込んで作つたらしい。屋根は葦やパピルスなどの湖岸でとれる材料で葺いていただろう。

『ルオー族の家』の中だが、農業を生計の手段としていたキクユ族とはかなり異なっているらしい。ドアを開けるといきなりドア付近が二重の壁 (double wall) になっている。それから右に生まれたばかりの動物を育む場所 (newly born animals) があり、左側に人間のベッドがある。ドアの反対側には陶土器をならべる棚 (Pots' stand) があり、その棚

とベッドの間に、火をたく場所 (Fire Place) を据えている。家の中央は空間でそこに円陣をはって人々が座る席 (Seats) がある。家畜との繋がりを濃厚に残した構造のようである。岩手県に「南部曲がり屋」を見たことがあるが、その土地で家畜が経済の中心をなしている時代の家の構造であることを知る。ルオー族の家もまた、狩猟と並んで、穀物や家畜の比重が高い経済であったと思われる。

そもそもニャンザ (Nyanza) とは、バンツ語で「湖」を意味するとの事。ワイナム湾 (Winam Gulf) はキスムの町の前に広がる湾のことであり、ホマ山 (Mt Homa) などがある辺りを、ニャンザ (Nyanza) 州というらしい。そしてキスムで泊まったサンセットホテルの屋上から見た水平線の向こうは、既にウガンダ (Uganda) 領ビクトリア湖であり、その横にタンザニア (Tanzania) 領ビクトリア湖が展開していることになる。このあたりに初めからルオー族が住んでいたわけではなかったようだ。ルオー族がスーダンやナイル川からやってきたのは12世紀以降と見た方がよい。Thimlich が『深い森』、Ohinga が『砦』というルオー語が正しければ、この遺跡は『砦』またはそれに類する軍事施設であったことになる。ルオー族にとって、防衛しなければならなかった相手とは、誰だったのだろうか。現地のガイドは、この遺跡の建造を約400年前と重い推定を語ってくれたが、そうだとすれば、16-17世紀頃の建造物と推定される。余り古い昔ではない。日本では関が原の戦いがあり、インドではイギリスの東インド会社の活動が間もなく始まろうとしている時代に、アフリカでは、やっと鉄を溶かして武器を作ったり、鋤や鍬を作る製鉄技術を持った種族が遺跡を残したというのだろうか。石作りといっても、川原の石を持ってきて積み上げたような砦が、ケニア第二位の勢力を誇るルオー (Luo) 族の遺跡なのだろうか？鉄を鍛えた跡や鉄を含んだスラグ (滓) が土中から発見されたというのが本当だろうか？そして何故放棄されたのだろうか。ワンデイバ博士 (Dr Wandibba) の説では、遺跡の建造者はバンツ (Bantu) 系の人々か、17世紀頃やってきたルオー族か、いずれの可能性もあり、前者の場合には非常に長い歳月を遡ることも考えられようが、より新しく、南下して来るルオー族やマサイ (Maasai) 族に対する防衛の為に築いたという推定もできるだろうと慎重な口振りだったとのこと。確かにルオー族と決め付けるよりも、バンツ族の「砦」と見た方がわかりやすいかもしれないと思った。ある本によるとルオー族の移動はかなりはっきりしており4回に分かれているとのこと。初めの集団は Joka-jok Group で、ニャンザ 地域に1500-1550年に定住したもの。次は Jok'Owiny Group で17世紀の初頭に移動してきて、Alego のバンツグループを倒したとのこと。次がやはり17世紀の Jok'Omoto Group であった。最後に移動してきたのが混成のグループでアバスバ (Abasuba) と呼ばれたグループであるが、ほとんどルオーの本来のものを失った連中であつたようだ。あるものはウガンダや他の国からの難民であつたり、タンザニアやビクトリア湖にある島々からの流れ者であつたりで、主としてニャンザの南岸に定住し、ルオー語に慣れ、ニャンザのルオー族の文化に統合されていった人々である。果たしてどの段階で Thimlich Ohinga

の「砦」が築かれ、そして放棄されたのだろうか。

Thimlich Ohinga の遺跡の発見は、航空測量の技師が空から確認したのが切掛けだという。15世紀前半の大ジンバブエと同じ時期と見るのか、16-17世紀のルオー族の建造と見るのか、それとも遥かに遡ってバンツー族の建造と見るのか、諸説はいまだ定かではない。しかし私の観測をいえば、3-4メートルの高さに積み上げた幅1メートル強の石の壁を、「砦」というには、余りにも手薄に見える。攻める方もそれほどの武器を持っていなかったということなのだろうか？同じアフリカの北岸のエジプトでは、紀元前3000年もの昔には、大石を動かしてピラミッドを築いていたのに、その記憶は何処に消えてしまったのだろうか。「ナイルのたまもの」という言葉があるようにナイル川がなければ古代エジプト文明はありえなかったとされる。そのナイル川の源流とされるビクトリア湖の育んでいたはずの人類の知恵はどこに行ってしまったのだろうか？空からよく見える場所に、不可思議な建造物を残した例は、南米ペルーの遺跡にもある。いまだかつて答えを見出すことができない。また文明には15世紀後半に成立した南米のインカ帝国のごとく、鉄器を知らず、金・銀・青銅器を用い、巨大な石造建築を築いた例もある。彼らは、馬・牛・らくだ等の大型家畜を知らなかったとされ、スペインの侵略にはその火砲と馬に乗った騎兵の前に脆くも滅び去ったという。アステカ、マヤ、インカの諸文明を偲ぶには、残された石造建築しかない。アフリカの石造建築遺跡である Thimlich Ohinga の遺跡は何だったのだろうか？そして何があったのだろうか？ 興味が尽きない。

参考文献

- ①Kenya Past and Present Issue-16 (Thimlich Ohinga 50-51)
- ②東アフリカ歴史紀行 ナイル川とインド洋の間に(高橋 英彦)
- ③Kisumu National Museum